

## 『本院侍従集』の構造

―場面による歌群認識―

松 室 重 哉

### ―はじめに

『本院侍従集』は、いわゆる物語的私家集が多数編まれた時代に出来た、歌語りの頃を代表する私家集の一つである。『延喜御集』、『一条摂政御集』、『元良親王集』、『伊勢集』などの物語的家集の研究において、『本院侍従集』もまた引き合いに出される。

しかし、似たような傾向の物語的家集であっても、『本院侍従集』は以下のような特徴を有する。

①描かれる恋愛が藤原兼通と本院侍従のそれただ一つであること  
『伊勢集』、『一条摂政御集』、『元良親王集』、『延喜御集』などではいずれも主人公は複数人の異性と関係にある。『本院侍従集全釈』（以下『全釈』）に「本作品に取り扱われている恋愛

が単数である点が目につく」とあるように、『本院侍従集』で描かれる恋愛関係は、兼通と本院侍従のそれのみである。

②虚実はさておくとして、進行が時系列に沿っていること  
史実に沿っているか否かはともかく、『本院侍従集』は時間の進行が一直線である。男が女に懸想してから、契りを結び、やがて疎遠になるまでの一連の流れを逆行することなく一直線上に描いている。

③場面の切り替えの役割を担う、歌の詠み人が移行すること  
この点について、詳しくは次章で見ていくが、本集は三部構成だと考えられ、さらにそれを十三の場面に分けることが出来る。そう見られる理由は、第一部、第二部、第三部を構成する、各場面の最初の歌を詠む人物が、各部において固定化されているからである。

本論では、右のような特徴に着目しつつ、特に③における場面の認識を主として、『本院侍従集』の構造を明らかにしていきたい。

『本院侍従集』は『海人手子良集 本院侍従集 義孝集 新注』（以下『新注と記す』<sup>②</sup>）が示す、穂久邇文庫本系統と冷泉家時雨亭文庫本系統とに分かれる、とする系統分別の見方を本論では援用するが、本文については時雨亭文庫本の翻刻を私によつて適宜濁音など、改めさせていただく。

## 二 『本院侍従集』の構成

本集の構成については、『全釈』が冒頭一首と後続の贈答十五組で捉え、それを四分構成と見る。『全釈』は穂久邇文庫本系統に属する松平文庫本で把握してそのような認識になっているが、伊井春樹氏はこれを三部構成と見る。<sup>③</sup>しかし、いずれの把握によつても物語の文脈に拠るものである。そのため、本論ではより本文の記述に沿う形で認識を試みたい。

そのため、本論では『本院侍従集』全文を見ていくこととする。（ただし、時雨亭文庫本の跋文は含めない。加えて、そのままでは文意が通らないなど、本文の理解に難を感じる部分に

ついては、『新注』の整理本文を利用する）

なお、巻末に参考資料として表を付したので、適宜参照されたい。

### 第一部

#### 第一場面

いまはむかしかむたちめの次郎なる人おほえいとかし  
こかりけれとまたわかうてかうふりもえぬおはしけり  
おほちは太政大臣にてなんおはしけるいもうとはきさ  
きはらのみにたてまつり給てふちつほにそさふらひ  
給けるその御いとこさふらひたまひけり□□このしら  
きみおもひかけたまう□物なといひてかくよみていひ  
いたたまへり

1 色にいて、今そしらする人しれすおもひ○つる深き心を  
なときこえたまうて御さとはいつこそとのたまひけれ  
は女

2 わか宿をそことも何かをしふへきいはてこそみめ尋けり  
やと

3 我思ひ空の煙と成ぬれば雲井成とも猶尋てん  
又おとこ

4 われならぬ人は待ともすきくれの命を捨て引かたによれ

返し

5 君ならぬ人はまたねとすきくれの引とてやらん心よはさ  
よ

「物などいひてかくよみていひいれたまへり」としたのは「このしらぎみ」、つまり兼通であり、第一場面は男の贈歌に端を発する。

次に見える女の歌は、「御さといづこそとのたまひければ女」とあるように、兼通が女の住む場所を尋ねたことに対しての返答の歌なので、これは返歌として見るべきである。この居場所を尋ねる言葉は、歌無しには口に出来ないものだったと捉えられる。『全釈』では、この2番歌を「本院侍従から詠みかけた」歌だと見ているが、同時にその説明として「男の問い——御里はいづくぞへ」の返事を歌でした場合——と見ており、やはり贈答を本院侍従から持かけた形とは認められない。

3 番歌は詞書を欠くが、2 番歌の返歌であることは「尋ねけりやと」、「猶尋てん」の呼応から明瞭である。

4 番歌の「又おとこ」の「又」は、これが同一場面で詠まれたことを示すものとして考えた。仮に別の場面であったと捉え

たとしても本論の主張を変えることは無いが、本集には「又」を持たない「おとこ」も存在し、その区別を失くすためである。

## 第二場面

おとこにやりとのはさまをいさゝかあけてものいひける人ことむつまじうおほえければむねいたしやきいしあてむ〇いりにければおとこわひていにけりつとめてふみをこせけり

6 あはてしも帰りしよりもいと、しくくるしといひしこと  
やわひしき

返し

7 ねぬなはのくるしき事はとふことのおこたることそうれ  
しかりける

又おとこ

8 ねぬなはのくるしきことのおこたるは我かくれたるしる  
し成らん

又おとこ

9 みを捨て露のみとはきえぬともあはれてふけき人のなき

宇喜藏  
白筆の本のま、

哉

返し女

10 夏の夜の露<sup>と</sup>ゆ<sup>きん</sup>思<sup>きん</sup>いてあかしてはあやなく我やぬれきぬを

女に「むねいたしやきいしあてむ」と仮病を使われて追い返され、「つとめてふみおこ」したのは兼通であるので、この場面でも男からやり取りが開始されている。以降の8番、9番は第一場面同様詞書は「又おとこ」となっており、これが第二場面についての歌を詠んでいるものとして解されよう。

### 第三場面

とて女のまかりいてにければあしたに女のさとはあらて本院なりけり

11 杣河の流るゝくれを君はまで我おりたちて筏士はせん

返し

12 い<sup>ゆめ</sup>かたしの心しすまは杣<sup>山</sup>川のくれをも我はよそにこそみ

「女のまかりいでにければあしたに」とあり、ここでは贈歌

の主が詞書の上には見当たらない。続く「女のさとはあらで本院なりけり」は説明的な文言で、女の退出先について述べているが、これは男が女の居場所を突き止めたことを示していると考えられ、物語性の強く表れている部分と見て良いだろう。

詞書の上には見えない詠み人だが、11番歌に「君はまで」とあることから、「今宵まうで来む。門鎖さで、あひ待て」（後撰集・巻第十四・恋六・よみ人しらず）と同様に考えられ、ここで「まで」と言っているのは男である。また、4番歌でも男の歌に「われならぬ人は待とも」とあり、待つのは女の側になる。第三場面の始点も男と考えられる。

### 第四場面

さてものきこえんとせちにのたまひければたゝしとみ  
こしにてうけたまはらんとありけるにこの女のつかひ  
ける人をかたらひて入たまひにけりさらに人もしらぬ  
事なりけり又のあしたにおとこ

13 露のをきてあかぬ心にわかるればわか衣手<sup>も</sup>そかはかさりける

返し

14 衣手<sup>も</sup>ぬめると聞にもいと、しくわれさへ夏の夜そうかり

ける

ここではついに男が女と結ばれる。「さらに人もしらぬ事なりけり」と見える草子地的記述も本集が物語的歌集であることを指摘する上で見逃せない。

やり取りのきつかけは「又のあしたにおとこ」とあるように、後朝の歌を詠みかけた男の側であることは言うまでもない。

## 第五場面

おとこひと夜ねて又の日

15 袖ぬれてほしそわつらふから衣君かた枕ふれぬよひには

かへし

16 わかためにおもひしあらはよそなから君かたもとはぬれ

しとぞ思

「又の日」とあるので、時間的にも第四場面とは隔たりがあることが分かる。

## 第六場面

おとこ

17 忍つ、夢の夜すから恋わひて涙の淵とうかひてそぬる

返し

18 うかひても君はねにけりいかなれはいつもおきあてなき

あかすらん

19 うかひても袂のみこそぬれまされ我もねられず君こふる

夜は

女

20 なけきつ、あなおほつかな唐衣ぬれまさるらん袖をみぬ

まは

おとこ

21 あさことにほしそわひぬる我袖はよる／＼ことにそほち

まされは

返し

22 ほす人もありとこそきけから衣うすく成行人のためには

『本院侍従集』は、場面の転換を行う際、詞書の上で示すことが多いが、ここでは「おとこ」とのみあり、それまでの「又おとこ」とは違う印象を読み取るべきである。18番歌の「君はねにけり」を勘案するなら、第五場面導入の「おとこひと夜ねて又の日」に続く印象も受けるが、それでは詞書の違いの説明

が付かない。男が違う場所で夜を明かしたことを指摘しているこれは、時間的に後だと考えると納得が行く。

19 番歌について『新注』の補説には、「当該歌は明らかに18番歌への返しであり、（中略）本集が、1 番歌詞書からも知られるように『男を主人公とする家集』であるという前提から考えると、『おとこ』という詞書はなくて当然だと言える」とある。2 番歌から3 番歌にかけてあった同様の例を思えば納得は行きそうだが、21 番歌が前歌の「ぬれまさるらん」、「袖を見ぬまは」に「我袖は」、「そほちまされば」の形で続くにも関わらず、「おとこ」という詞書を持つているだけに、肯定することは出来ない。このような問題から、「又おとこ」でないが第六場面を含めた。「又」という表現は、同一場面で詠われたが、後の歌が前の歌に意味的に続かない場合に付されたものと取るべきだろう。

## 第七場面

おとこ

23 人しれす有明の月のいひしかは露そわか身におきまさりける

かへし

24 夜な／＼になりぬと思は露のをきてぬるらん袖もあらしと思ふ

返しおとこ

25 君かみにそはぬはかりをよひことに露のおきゐてあかしこそすれ

『新注』では23 番歌の「有明の月のいひしかば」を、穂久邇文庫本の「いでしかば」によって改めている。この見方に沿うにせよ沿わないにせよ、男は有明の月が見える場所に身を移していることは言えるだろう。すなわち、場面はここで切り替わっているのである。前の歌とも切れていることは明白で、詞書にも「又」が見受けられないことから異なるものとして見て良いだろう。

## 第八場面

おとこいて、すなはち

26 ほの／＼と明行程は打なけきしの、めよりそねはなかけける

返し女

27 なほさりにしの、めよりは明くれはうは露はかりをくとみ

えける

「おとこいで、すなはち」から始まる後朝の贈答になる。従って場面は切り替わっていることが分かる。

## 第二部

### 第九場面

かくてすみわたり給ふ程にこの女をよはふ人ぬすみも  
ていにければおとこ君いみしふなき給ひければ女き、  
てあはれと思てかくなんいひやれりける

28 世中を思ふもくるし思はしと思ふも身にはやまひ成けり

おとこ返し

29 忍ふれど猶わすられすおもほゆるやまひそ君にわれはまさ  
れる

又女

30 おもはずにある世中のくるしきにまさるやまひはあらしと  
ぞ思ふ

ここでやり取りのきつかけを作るのは、本院侍従を盗み出されて悲嘆に暮れる兼通の様子を聞いて、「あはれと思てかくな

んいひやれりける」本院侍従である。「おとこ君いみしふなき給ひければ」を見ると、男の側からのアプローチも考えられるが、「女きゝて」とあるのが重要になる。男は直接女に何かを言いかけたのではなく、ただ悲嘆に暮れており、そのことを女が耳にして、憐れんだと書かれているのである。

ここに大きな構造の転換が起きる。それまでは男からの歌を受けるばかりであつたのが、逆に女から歌をやるようになっていく。それは後続の第十・第十一場面ではつきりと分かるようになる。

### 第十場面

この女内にまいりにければいといみしと思てそなき給  
けるひさしくありて女のいひけるにや

31 わか身ゆへうきとは思をきなからつらきは人の心なりけり  
かへし

32 身のうさを思しりぬる物ならはつらき心は何かうらみん

女の参内を嘆く兼通であつたが、「ひさしくありて女のいひけるにや」とあるように、これもやはり女の側からである。第七贈答同様、男の様子を慮って歌を贈る様子が見える。「ひさ

### 第三部

#### 第十二場面

しくありて」が、男の嘆きを直接的に受けてその直後に詠んだものではなく、後になって女が自発的に歌を詠んだことを表出していると考えられよう。

#### 第十一場面

- かくてこのきみ女おやの御ふくになりたまひぬと聞て  
とふらひたてまつり給たりける御かへりことにいつも  
しくれはとのたまへりけるに女  
33 われさへそ袖は露けき藤衣君おりたちてぬると聞しに  
返し

- 34 をとにのみ聞わたりつる藤衣ふかくわひしと今そしりぬる

兼通の服喪に際しての状況が述べられるが、ここは入れ子式になつており、33番歌は、「いつもしぐれは」という歌への返歌であり、その歌は「とぶらひたてまつり給たりける」本院侍従の言葉ないし歌への「御かへりごと」に詠まれたものである。つまり、ここでも女の側に端を発していると言える。やはりその理由は「御ぶくになりたまひぬと聞て」であり、女は間接的に男の事情を知つて思ひやつたと描かれる。

- この女のともたちのもとよりしらうきみのものとのめのことさまになりたることいかにおほすらんとて  
35 ほかさまになひくを見つゝ塩竈の煙はいとゝもえまさるらん  
返しおとこ

- 36 塩竈のもゆる煙もはある物をからきなきをたくかわひしさ

35番歌の詞書には時間的な位相は見えないが、本院侍従が兼通のもとから奪われた後であることは「もとのめのことさまになりたる」と見えることから分かる。

ここでやり取りを持ちかけるのは「女のともだち」であり、「おとこ」でも「女」でもない第三者になつてゐる。

「この女のともだちのもどより」とのみあるばかりで、最早兼通の行動が示されていない点にも注目すべきである。

#### 第十三場面

とあれはなをおほすらんとこそおほゆれとて女の御かたのこたちのいひけるや



37 初秋の花の心をほともなくうつろふ色をいかにみるらん

返し

38 時わかす垣ほに生ふるなてしこはうつろふほと秋もしらぬを

ぬを

又返し

39 色かはる萩のした葉も有物をいかてか秋をしらすといふらん

ん

その比おとこ君兵衛のすけになりたまへりいまはほり

かはの中納言とかや

詠み人についてであるが、36番歌を受けて「なおおぼすらん」と感想を抱いた人物は「女のともだち」と考え、「女の御かたのごたち」もそれと同様に考えても良く思われるが、別の表現を用いていることから別の人物の可能性も考えられ、場面として分けるべく解した。

### 三 各部各場面から読み取れる構造の意味

ここまで、『本院侍従集』の本文、とりわけ詞書に着目し、三部十三場面に分けた。

それによれば、第一部（第一場面～第八場面）の各やり取りは全て「おとこ」の側に端を発し、第二部（第九場面～第十一場面）ではそれが「女」の側にシフトする。そして最後は女の側に立つ第三者一名ないし二名となる。

この構成は見事なまでに男と女の距離感を表出している。第一部においては、いずれも男からやり取りが始まり、男の積極性が示される。

第二部においては、最早兼通は直接本院侍従に接する位置におらず、彼の方からはアプローチすることが出来ない状態にある。そのような状況になって初めて能動的に歌をやる女の姿勢は、何とも意地の悪いものに見える。いずれも女の側から持ちかけるようになるこの転換は、男が女に影響力を持てなくなつたという、関係性の変化を示唆するものだと考えられるのではないだろうか。

そして第三部では、第二部には描かれていた男の様子は全く描かれることがなくなる。同時に女も姿を消し、女の側の人間によって、話題の対象になるのみである。前の部で哀れみの姿勢で歌を贈った女に比べて、いなくなつた女をどう思うかと歌をやる「女のともだち」や「女の御かたのごたち」の姿は、女から完全に隔絶した男に恋の終焉を通告する役割を持っている

のだろう。前の部には見えた、情けをかけて歌を送ってくる女は最早いらないから、そのために第三者が男に歌をやるのである。

#### 四、終わりに

『本院侍従集』の構造を部に分けて見る考え方は既存の研究にあったが、その中でやり取りを誰の立場から開始し、それがまとまりを持つていることについて指摘する研究は未だ見られない。本集の本文批評もまだ未成熟な部分が多く見受けられ、本論も詞書に少し着目した程度に過ぎず、より切り込んだ研究は今後の課題とするところである。

#### 注

- (1) 目加田さくを・中嶋眞理子『本院侍従集全釈』（風間書房、一九九一年）
- (2) 片桐洋一・藤川晶子ら『海人手子良集 本院侍従集 義孝集 新注』（青簡社、二〇一〇年）
- (3) 伊井春樹「本院侍従の宮仕えについて」（『平安文学研究』第三六号）

※伊井氏の「本文は、桂宮本叢書第九卷を使用する」と参照さ

れた『桂宮本叢書 第九卷』（養徳社、一九五四年）に翻刻された本文は書陵部本の甲本（時雨亭文庫本系統）と乙本（穂久邇文庫本系統）の両方であり、伊井氏がいずれに依って構成を考察されたかは定かではない。

#### 参考文献

- ・難波喜造「本院女御考―一条摂政御集の研究より―」（『日本文学史研究』第九号）
- ・後藤利雄「本院侍従集について―女は斎宮女御か―」（『国語と国文学』一九五六年三月）
- ・守屋省吾「蜻蛉日記形成論」（笠間書院、一九七五年）
- ・稲賀敬二「本院侍従―その生涯と集―」（『広島大学文学部紀要』第三六巻）
- ・堤和博「歌語り・歌物語隆盛の頃―伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学―」（和泉書院、二〇〇七年）
- ・山口博「王朝歌壇の研究―村上、冷泉、円融朝編―」（松楓社、一九六七年）
- ・守屋省吾「歌人藤原兼通の実像と虚像」（『平安文学研究会』、一九七三年）
- ・荻窪昭子「本院侍従集試論」（『国文目白』第一七号）

参考資料

- ・高橋正治「本院侍従集覚書」(『清泉女子大学紀要』第九号)
- ・片桐洋一「一条摂政御集について」(『国語国文』一九六五年)
- ・同氏「本院侍従」(『国文学 解釈と教材の研究』一九六六年)

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	歌番号
二					一					場面番号
女	男	男	女	男	女	男	男	女	男	詠み人
返し女	又おとこ	又おとこ	返し	つとめてふみをこせけり	返し	又おとこ	ナシ	女	このしらきもおもひかけたまう□物な といひてかくよみていひいたまへり	該当する詞書

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	歌番号
六					五			四		三		場面番号
女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	詠み人
返し	おとこ	女	ナシ	返し	おとこ	かへし	おとこひと夜ねて又の日	返し	又のあしたにおとこ	返し	ナシ	該当する詞書

32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	歌番号
十		九			八		七			場面番号
男	女	女	男	女	女	男	男	女	男	詠み人
かへし	ひさしくありて女のいひけるにや	又女	おとこ返し	おとこ君いみしふなき給ひければ女 きゝてあはれと思てかくなんいひやれ りける	返し女	おとこいてゝすなはち	返しおとこ	かへし	おとこ	該当する詞書

39	38	37	36	35	34	33	歌番号
十三			十二		十一		場面番号
女のごたち	男	女のごたち	男	女のごたち	男	女	詠み人
又返し	返し	女の御かたのこたちのいひける	返しおとこ	この女のごたちのもとより	返し	御かへりことにいつもしくはとのたまへりけるに女	該当する詞書

(まつむろ じゅうや／本学大学院生)